

名大医学部学友時報 2019 4

目 次

1. 教授就任	錦織 宏	(1)	9. 祝卒業	(11)
2. 特任教授就任	鶴田 敏久	(3)	10. 平成 30 年度卒業生名簿	(11)
3. 学術欄	藤城 光弘	(4)	11. 叙勲受章申告のお願い	(11)
4. 最終講義	藤本 豊士	(6)	12. 平成 31 年卒業謝恩会	(12)
	高橋 隆	(7)	13. つるま賞授賞式	(13)
5. 会員寄稿	佐藤 祐造	(8)	14. 2018 年度卒業・修了留学生名簿	(13)
6. クラス会だより	豪一会	(9)	15. 第 110 回名古屋大学医学部学友大会ご案内	(16)
7. 人生山あり谷あり	井口 昭久	(9)	16. 編集後記	(16)
8. 医師倭人伝	原田 陽平	(10)		

教授 就 任

総合管理医学講座 総合医学教育学（総合医学教育センター）

にしごり ひろし
教授 錦織 宏



2005 年 9 月 英国オックスフォード大学 研究員
2006 年 9 月 英国ダンディー大学 医学教育学 修士課程
2007 年 10 月 東京大学医学教育国際協力研究センター 助教
2009 年 1 月 東京大学医学教育国際協力研究センター 講師
2012 年 1 月 京都大学大学院医学研究科医学教育推進センター 准教授
2019 年 3 月 名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学教育学センター 教授

〈業 績〉

1. Nishigori H, Masuda K, Kikukawa M, et al. A model teaching session for the hypothesis-driven physical examination. Medical Teacher. 2011.33:410-417.
2. Nishigori H, Harrison R, Busari J, Dornan T. Bushido and Medical Professionalism in Japan. Academic Medicine. 2014.
3. Haruta J, Breugelmans R, Nishigori H. Translation and cultural adaptation of the Japanese version of the inter-professional facilitation scale. Journal of Interprofessional Care. 2017. 32:321-328.
4. Matsui T, Sato M, Kato Y, Nishigori H. Professional identity formation of female doctors in Japan - gap between the married and unmarried. BMC Medical Education. 2019. 19:55
5. Nishigori H, Suzuki T, Matsui T, Busari J, Dornan T. A

〈経 歴〉

1998 年 3 月 名古屋大学医学部医学科 卒業
1998 年 5 月 市立舞鶴市民病院 内科研修医
2001 年 9 月 名古屋大学医学部附属病院 第三内科医員
2002 年 1 月 愛知厚生連海南病院 内科医員
2004 年 4 月 名古屋大学大学院医学系研究科 総合診療医学 博士課程

two-edged sword. Narrative inquiry into Japanese doctors' intrinsic motivation. The Asian Pacific Scholar. In press.

この度、2019年3月1日付けで、総合医学教育センター教授を拝命いたしました。この場をお借りして学友会の皆様にご挨拶申し上げます。

私は1998年に名古屋大学医学部を卒業いたしました。初期臨床研修は、大リーガー医の招聘などユニークな臨床研修を展開していた市立舞鶴市民病院で行いました。この折に充実した教育環境の中で昼夜を問わず臨床医として研鑽した経験が、私のキャリアの原点になっています。その後、2001年に第三内科に帰局し、当センター前教授の植村和正先生のご指導のもと、総合内科の臨床と研修医や学生の教育に取り組みました。2002年からは現総長の松尾清一先生のご配慮で海南病院に赴任し、腎臓内科の研修を積む傍ら、臨床研修改革に取り組みました。同院の研修医数は大幅に増えたのですが、多くの教育上の失敗も経験しました。その省察から医学教育学を学ぶ必要性を感じ、2004年に日本医学教育学会前理事長の伴信太郎先生率いる総合診療医学教室の大学院に進学し、教育発達科学研究科の大谷尚教授の指導を受ける機会をいただきました。そして在学中に英国に留学し、Oxford大学で一年間、さらに英国最古の医学教育学修士課程を持つDundee大学で一年間、医学教育学を学びました。帰国後は東京大学にご縁をいただき、2007年から約4年間、研究者育成を主眼としたFaculty Developmentや臨床診断推論の教育に関する研究に取り組みました。またJICAによる国際協力活動でラオスやアフガニスタンの医学教育に関する仕事にも従事し、文部科学省の医学教育政策に関わる仕事にもこの頃から関わってきています。2012年からは京都大学に拠点を移し、約7年間、同大学の医学教育に関する実務に関わった他、医師のプロフェッショナリズムに関する研究や医学教育学プログラムの構築などに取り組みました。またこの間に国際的な活動を幅広く展開し、欧州医学教育学会の日本担当理事、シンガポールを拠点にしたアジア太平洋医学教育研究者ネットワークの共同代表、タイ王国保健省の地域医療教育プロジェクトのリーダー、マレーシア国際医科大学の外部評価委員の他、マレーシア・韓国・スリランカ・台湾・インドネシア・カナダなどでも積極的に活動してきています。医学教育学分野は未だ新しい分野ではありますが、指導する大学院生の数も少しずつ増えてきています。

社会における少子高齢化や情報革命に加えて、新自由主義の影響もあって、21世紀に入ってからの国内外での卒前・卒後の医学教育の変動には目覚ましいものがあります。本学においては、名大の歴史や文化を踏まえつつ、その強みを生かし、時代にも合った教育環境を整備する必要があります。卒前教育においては学部教育委員会、卒後教育においては卒後臨床研修・キャリア形成支援センターと連携・連動し、シームレスな医学教育の形を作っていくことを最初の目標に掲げました。また医学教育に関する部門横断的な議論の場を構築し、専門的知見を提供していくことも私の責務だと認識しております。特に、欧米からの輸入が主であったこれまでの医学教育から脱却し、我々の文化に合ったBest Evidence Medical Educationを展開することが重要だと考えています。

医学教育学は、医学と人文社会科学の諸学問をつなぐ窓になりうる分野です。私も医学部における文系の研究者として、様々な視点を皆様に提供していきたいと思っています。2005年から当センターの重責を担っておられた初代教授の植村先生が築かれた御業績の上に丁寧に仕事を積み重ねていく所存です。皆様にはどうかご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

教授 就任インタビュー

—— このたびは教授就任おめでとうございます。教授に就任された心境や抱負をお聞かせください。

ありがとうございます。医学教育全般に関しての実務的な仕事については、組織が良くなる方向にしっかりと仕事をしていきたいという気持ちです。研究者としては、日本におけるこの分野の研究者がかなり少ないので、リサーチユニバーシティであるこの名古屋大学で、他の分野の研究者の先生たちから刺激を受けながら、新しい知を生み出していきたいです。

—— 先生がこの道に進まれたきっかけ、経緯を教えてください。

もともとこのような文化系の学問分野が好きで、かつ人に対する関心が強かったからだと思います。

学生のころに学生会の委員長をやっていて、大学のあり方について考える機会も多かったのですが、それも面白くて、結果的に今のキャリアにつながっています。

—— この分野を研究してみて特に何か言いたいことや気づいたこと、魅力などを教えてください。

医療現場は答えのない問いに満ちあふれています。教育はさらにそうです。この答えのない問いについて考えたり対話したりするのがとても楽しいです。哲学する、という言い方になるのかもしれませんが、医学部の教員として、内科医としても働きつつ、対話を通して思索する時間はとても幸せに感じます。

—— 最後に学生へのメッセージをお願いします。

いろいろな人に会ってほしいです。アカデミアの拠点である大学にはいろいろな価値観の人がいて、そういうヘテロな集団であることが大学の強みだと思っています。そして可能な限り、他人の時間を過ごすのではなく、自分の時間を過ごしてほしいですね。また皆さんの一つ一つの行動が皆さん自身の価値観の表現形であることに自覚的になってもらいたいとも思います。時には直感のままに行動してみるのもいいです。いろいろと失敗することもあります。そこから他者と違う自分自身が見えてきます。一生懸命自分の頭で考えて、自身の哲学を構築していきましょう。

(インタビュー：石井佐彩、高見音宇)

特任教授就任

先端医療開発部 先端医療・臨床研究支援センター 特任教授

つる た とし ひさ
鶴田 敏久

〈経歴〉

1985年3月 東京医科大学医学部 卒業
1985年5月 東京女子医科大学第二病院 小児科研修医
1986年11月 国保松戸市立病院 新生児科
1987年11月 財団法人上村病院 小児科
1988年4月 東京大学大学院医学系研究科内科学博士課程入学
1988年4月 東京大学医学研究所 内科
1992年11月 東京医科大学病院 小児科助手
1996年2月 東京大学大学院医学系研究科内科学博士課程修了 学位取得
1999年6月 東京女子医科大学第二病院 輸血部講師
2001年11月 東京大学医学研究所 小児細胞治療科教務職員
2004年2月 東京女子医科大学第二病院 輸血部講師
2008年4月 厚生労働省九州厚生局健康福祉部医事課 臨床研修審査専門官
2010年4月 国立病院機構熊本医療センター 臨床検査科医長
2013年3月 九州大学病院 先端分子細胞治療科講師
2014年10月 九州大学病院 先端分子細胞治療科診療准教授
2015年4月 東京女子医科大学病院 小児科准教授
2019年2月 名古屋大学医学部附属病院 先端医療・臨床研究支援センター特任教授

〈業績〉

1. Tsuruta T: Recent Advances in Hematopoietic Stem Cell Gene Therapy In: Demirel T(ed): Innovations in Stem Cell Transplantation. Pp. 107-135, InTech, Rijeka, Croatia, 2013
2. Tsuruta T, Aihara Y, Kanno H, Funase M, Murayama T: Shared molecular targets in pediatric gliomas and ependymomas. Pediatric Blood & Cancer 57:1117-1123, 2011
3. Tsuruta T, Tani K, Hoshika A, Asano S: Alkaline phosphatase, defensin gene expression and effect of myeloid cell growth factors in normal and leukemic cells. Leukemia & Lymphoma 32:237-247, 1999
4. Tsuruta T, Tani K, Hoshika A, Asano S: Myeloperoxidase gene expression and regulation by myeloid cell growth factors in normal and leukemic cells. Leukemia & Lymphoma 32:257-267, 1999
5. Tsuruta T, Tani K, Shimane M, Ozawa K, Takahashi S: Effects of myeloid cell growth factors on alkaline phosphatase, myeloperoxidase, defensin and granulocyte colony-stimulating factor receptor mRNA expression in haemopoietic cells of normal individuals and myeloid disorders. British Journal of Haematology 92(1): 9-22, 1996

この度、平成31年2月1日付で、名古屋大学医学部附属病院先端医療開発部、先進医療・臨床研究センター特任教授を拝命いたしました。同センターは基礎と臨床の橋渡し研究、いわゆるトランスレーショナルリサーチを担当しています。その中で臨床試験などのプロジェクトマネージャーの仕事を中心にさ

せていただく予定です。紙面をお借りして学友会の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私はこれまで小児血液・腫瘍性疾患を専門とした臨床医として、診療、研究、教育に携わってまいりました。初期研修を東京女子医科大学第二病院小児科、松戸市立病院新生児科で行った後に、骨髄移植（造血幹細胞移植）の臨床や血液・悪性腫瘍の基礎研究を行うため東京大学医学研究所（医科研）内科の大学院に進みました。当時はごく一部の施設でしか骨髄移植は行えなかったため、医科研では「他の施設で治療が出来ず、最後の可能性に期待して」というような難治性の患者さんを中心とした診療を行っておりました。実際は骨髄バンクもなかった時代で、いつも敗北感に苛まれていました。それだけに新しい治療方法の開発には興味を持っておりました。

新生児科研修医の頃に臍帯血や未熟児の血液中には未熟な造血幹細胞が多く含まれることを知り、臍帯血が骨髄移植の代わりに使えるのではないかと考えていました。大学院生の頃に米国と仏国との共同でファンconi貧血患児に対する世界初の臍帯血移植の報告があり、臍帯血移植を行いたいという意欲が強くなりました。

その後に移った東京医科大学小児科では臍帯血移植に関して産婦人科や血液内科などの協力を得ることができました。さらに臍帯血中の幹細胞の質や安全性の評価を医科研や日本赤十字社にお願いすることにより、再発白血病の患児のお母様の同胞出産時に、移植に十分と思われる質と量の臍帯血採取を行うことが出来ました。残念ながらHLAが患児と半分しか一致していなかったためすぐに移植を行うことはできませんでしたが、HLAが一致していれば倫理審査委員会の承認を得て、すぐに臍帯血移植を行うつもりでした。東海大学でわが国初の臍帯血移植が行われた1年ほど前だったと記憶しています。

以前は本人やご家族の同意があり、倫理審査委員会の承認が得られれば比較的容易に新しい医療を導入することもできました。現在は非常に多くの指針があり、手続きも煩雑になっています。特に最近の臨床試験での不祥事により、平成30年臨床研究法が施行され、法的介入も厳しくなっています。

大学病院などでは今の医学ではどうしようもない難治性の疾患に接することも多いと思われます。しかしながら、若い先生方には柔軟な考え方があり、いろいろなアイデアが浮かんでくるのではないかと思います。それらを実際に臨床応用するには知財の獲得に始まり、多くのクリアしなければならない研究過程があります。先端医療開発部では資金面も含め、そのような研究のお手伝いをさせていただいています。一つの新しい薬剤や医療を開発するには数年、時として10年以上が必要とされています。そのため若い先生方の力が必要です。微力ですが、臨床医の立場からそのような先生方の研究のお手伝いをするにより、一人でも多くの難病で苦しむ患者様を救うことが出来ればと考えております。本学は初めてで不慣れなところも多いですが、何卒よろしく願い申し上げます。